

<主要株価指数>		
	終値	前日比
日経平均株価	15274.07	139.32
NYダウ	16,421.89	61.71
DAX(独)	9,542.87	0.85
FTSE100(英)	6,788.49	13.07
CAC40(仏)	4,417.04	25.79

<外国為替>※		
ドル円	102.97 円	-0.10 円
ユーロドル	1.3858 ドル	-0.00 ドル

<長期金利>※		
日本	0.630 %	0.01 %
米国	2.737 %	0.03 %
英国	2.767 %	0.05 %
ドイツ	1.647 %	0.04 %
フランス	2.217 %	0.05 %
イタリア	3.442 %	0.07 %
スペイン	3.404 %	0.04 %

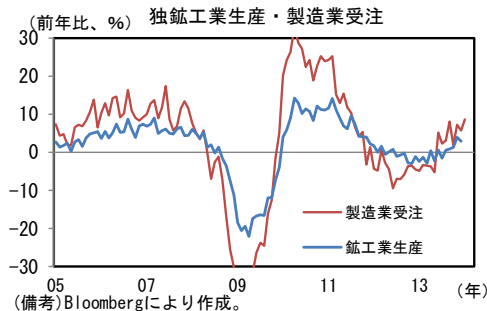
  

<商品>		
NY原油	101.56 ドル	0.11 ドル
NY金	1351.80 ドル	11.50 ドル

※は右上記載時刻における直近値。図中の点線は前日終値。  
(出所) Bloomberg

### 【海外株式市場・経済指標他】 ～S&P500：史上最高値更新～

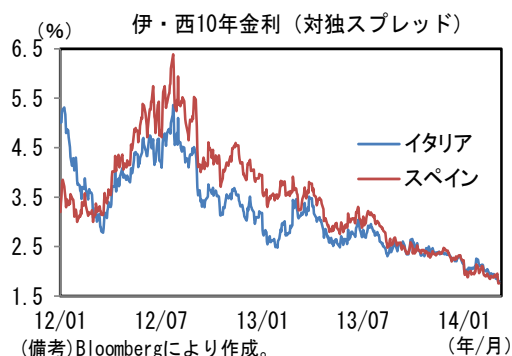
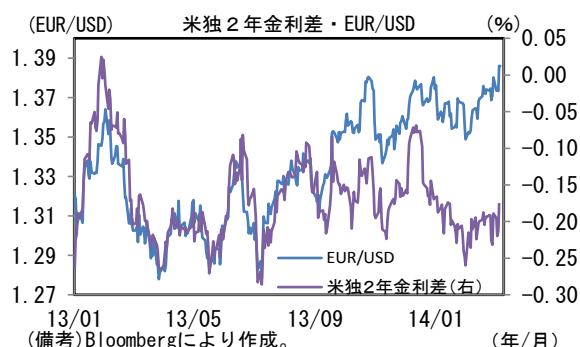
- ・ NYダウ平均株価は前日比61.71ドルの16421.89ドルで取引を終了。S&P500は史上最高値更新。
- ・ ECB理事会は、市場参加者の約2割が利下げを予想するなか、金融政策の現状維持を決定。SMPの不胎化中止措置も講じなかった。新たに発表されたスタッフ経済見通しは14年：+1.2%（従来+1.1%）、15年：+1.5%（据置）、16年：+1.8%。物価予想は14年：+1.0%（従来+1.1%）、15年：+1.3%（据置）、16年：+1.5%とされた。なお、物価は2016年4Qに+1.7%に達すると補足。
- ・ 独製造業受注は前月比+1.2%と市場予想（+0.9%）を上回り、前月（▲0.2%）から大幅反発。国内（+1.6%）、海外（+1.0%）ともに強く3ヶ月年率では+9.3%に到達。財別では資本財が3ヶ月連続の増加で非常に強く、中間財、消費財も反発した。鉱工業生産指数では増産基調がはっきりと確認できるだろう。
- ・ 新規失業保険申請件数は32.3万件と14年入り後の最低を記録。前週分はプレジデントデーに伴う季節調整の難しさから統計が歪んでいた可能性が高いが、結局のところ4週移動平均で見るとほぼ横ばいとなっている。



本資料は情報提供を目的として作成されたものであり、投資勧誘を目的としたものではありません。作成時点で、第一生命経済研究所経済調査部が信ずるに足ると判断した情報に基づき作成していますが、その正確性、完全性に対する責任は負いません。見通しは予告なく変更されることがあります。また、記載された内容は、第一生命ないしはその関連会社の投資方針と常に整合的であるとは限りません。

## 【外国為替相場・債券市場】～EUR急伸～

- ・6日のG10通貨はEURとAUDが強くJPYが全面安。ECB会合結果を受けてEUR/USDは急上昇し、一時1.3873を付け昨年来高値(1.3895)に肉薄。USD/JPYは米金利上昇と欧米株高が併存するなか103を回復。7日日本時間はニュースに乏しく主要通貨に目立った動きは見られない。
- ・米10年金利は+3.2bpの2.737%。米指標改善と欧州債下落が背景。欧州債市場はコア国軟調、GIIPS区々。独10年金利が+4.2bpの1.647%となった一方で、ギリシャ、ポルトガル金利が低下。スペインの対独スプレッドも縮小し、イタリアのそれは小幅なワイドニングに留まった。追加緩和期待の後退にも拘らずGIIPS債に失望売りが集中しなかったことは債務問題の終息を象徴する動きと言えよう。



## 【国内株式市場・経済指標他】～日銀会合は無風通過～

- ・日経平均株価は前日比+139.32円の15274.07円で取引を終了。
- ・3月10-11日の日銀金融政策決定会合では金融政策の現状維持が決定されよう。4月の追加緩和期待も一部にあるが、日銀が緩和に踏み切る理由は乏しい。声明分や総裁会見でも追加緩和を予兆させるようなメッセージはでないだろう(筆者予想は現状維持)。市場の反応も限定的とみる。

## 【注目点】～春の訪れと強いドル～

- ・ECBは物価目標未達を予想しているにも拘らず追加緩和策を講じなかった。市場はECBに残されたカードが少ないことを見越し、EUR/USDは1.39を窺う水準まで上昇した。14年末にEUR/USDが1.28に到達すると見込む筆者にとって痛手となったが、それでも予想は据え置く。理由は大別して二つ。一つは、米国サイドからのドル高圧力。米経済の成長軌道が3%に回帰すれば、FEDの利上げ観測が浸透するのは時間の問題。BOEが直面しているようにフォワードガイダンス強化は容易でない。そうした状況下ではJPY、CHF、EURの順に下落が見込まれる。飽くまで主観だが、ECBが一段のユーロ高を警戒していないようにみえるのは、彼らが「強いドル」を期待しているからだろう。もう一つは、ECBの追加緩和期待が復活すること。追加緩和を講じない根拠となった強気見通しがユーロ安の足枷となり、それが皮肉なことにデフレ圧力を高めるだろう(総裁も既往のユーロ高によりインフレ率が0.4-0.5%下押しされたとしている)。つまり、ユーロが現行水準で高止まりすること自体が将来的なユーロ安要因となる。なお、各国中銀に共通して言えることだが、中銀の示した強気シナリオは当初こそタカ派と捉えられるが、その後、強気シナリオが下振れリスクに晒される段階では逆に中銀にハト派姿勢への傾斜を迫るものへと変貌する。
- ・今晚発表される雇用統計は引き続き悪天候のノイズが話題となろう。米経済ははじめ先進国経済の成長軌道は、米国の悪天候と日本の消費税というノイズから“手探り状態”となっている。しかし、ノイズの少ないユーロ圏経済指標は総じて堅調を維持している。PMIは国・産業ごとにバラつきがあるもののユーロ圏総合指数は改善を続けており、本日は独鉱工業生産(及びユーロ圏)も反発が見込まれる。こうした事実は、日米経済のポテンシャルを推測するうえで非常に心強い。足もとのUSD/JPYや日本株の上昇は、米経済のノイズが除去された段階(恐らく4月)でより確りとしたものになるだろう。また、そうした局面ではEUR/USDの反落とEUR/CHFの反発が見込まれる。